

視野欠損が運転時の視空間に与える影響について

医療法人社団 敬仁会 桔梗ヶ原病院¹⁾
言語聴覚士 佐藤理恵¹⁾, 作業療法士 藤原敦史¹⁾, 作業療法士 松塚翔司¹⁾, 医師 園原和樹¹⁾

【はじめに】

視野欠損のある症例に対する運転適性評価の方法は確立されていない。今回、視野欠損を呈した症例の運転支援を経験した。評価方法(ドライビングシミュレータと実車)により、運転時の視空間における視野欠損の領域に違いを認めため報告する。

【症例】

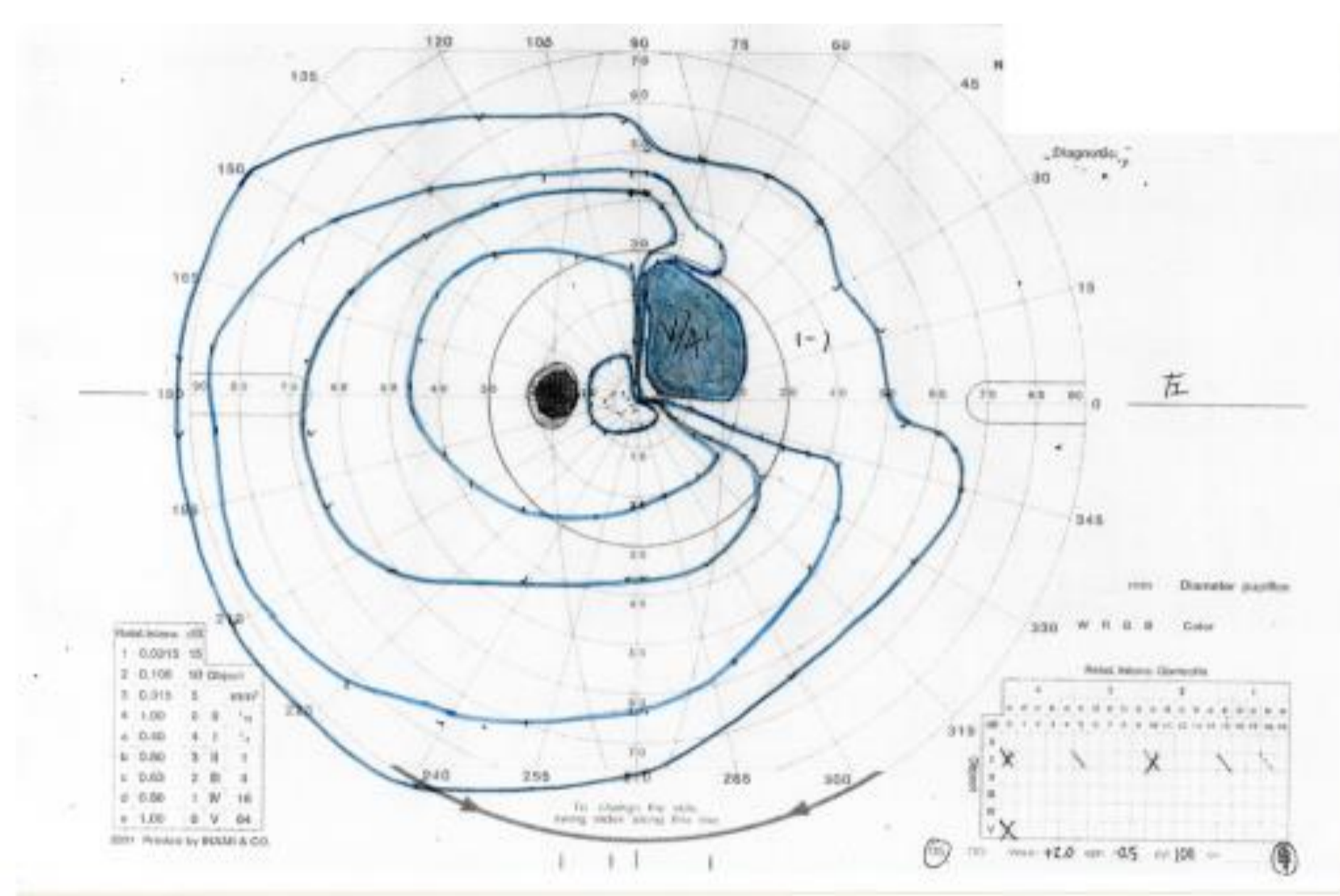
30歳代, 男性, 外傷性脳損傷後、高次脳機能障害(記銘力低下, 注意障害, 言語障害)を認める。

【経過】

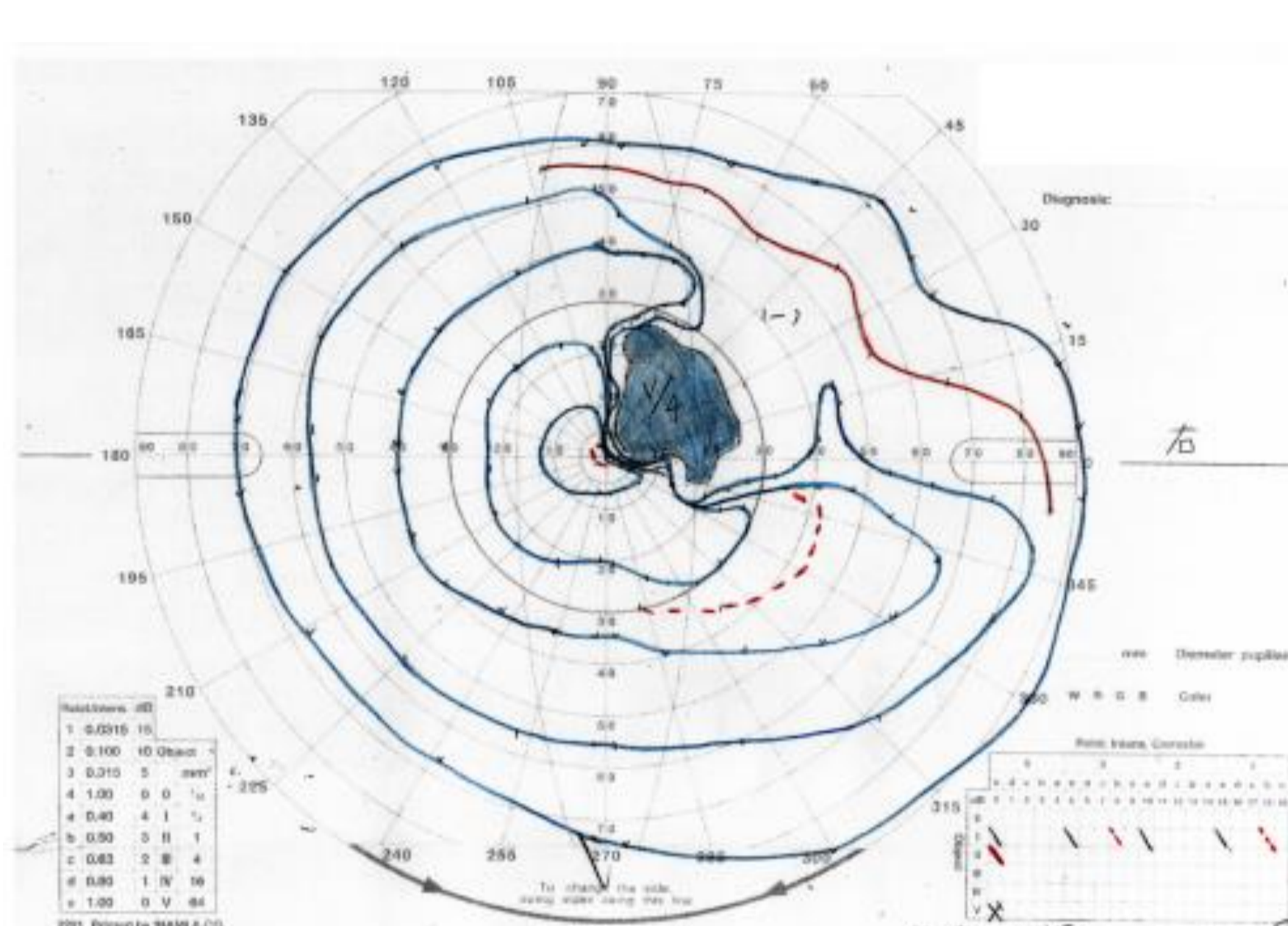
202X年Y月に受傷し、54病日後に当院へ転院した。経過中に患者本人より右上の見えづらさの訴えがあった。ゴールドマン視野検査を行い、右上の視野欠損(傍中心暗点)を認めた。介入当初はドライビングシミュレータ(HONDAセーフティナビ: 以下DS)の運転操作課題においてモニター画面の右上の広範囲に見落としが見られた。患者本人が視野欠損の範囲を自覚し、代償行動ができるように訓練を行った。実車評価では、右側から走行してくる車や対向車の見落としはなく、患者本人より視野欠損部と重なるのは信号付近のみであるとの発言が聞かれた。その後、運転再開に至った。

【傍中心暗点】

左眼



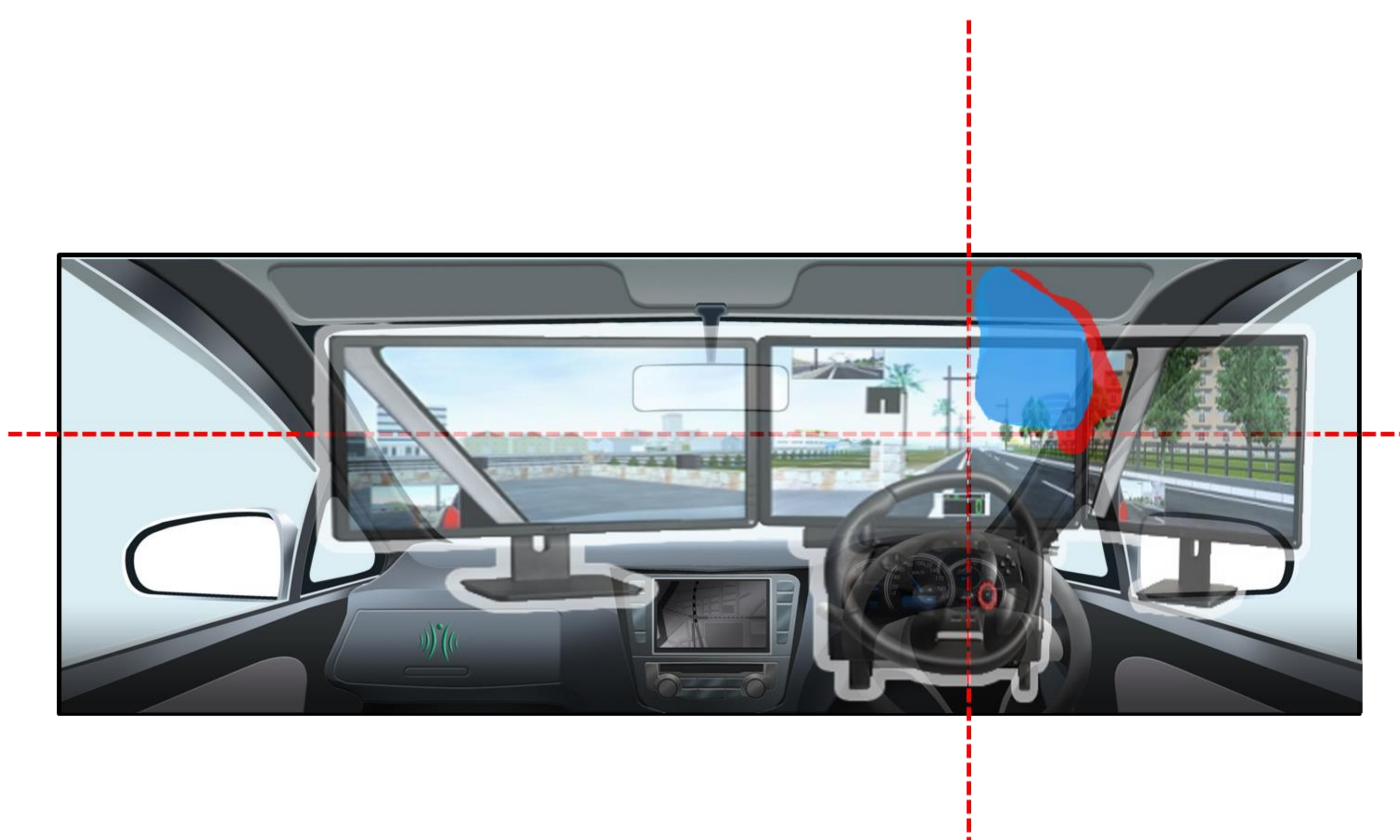
右眼



傍中心暗点: 中心視野に欠損があり、見ようとしても見えない部分がある事。

【考察】

現実世界と比べてDSは視空間が圧縮されて表示されるため、視野欠損の範囲がDS上では相対的に広くなり見落としが起こると思われる。またDS上で見落としがあったとしても、実車評価においては見落としがない場合もありうると考えられる。



【まとめ】

視野障害者の運転適性評価を行う場合は、色々な方向から視野障害の評価を行うことが望ましい。またDSと実車評価の違いを知ることにより運転適性評価の精度が向上するものと考えた。

演題発表に関連し、発表者らの開示すべきCOI関係にある企業などはありません。